「イスラエルとパレスチナの若者について」

2004 年 8 月、イスラエルとパレスチナの高校生のライフスタイルを探るため、日本・イスラエル・パレスチナ学生会議にご協力をいただき、当時日本に滞在中だった双方の大学生たちにインタビューを行いました。
一時間弱という短時間で出会うことのできた若者像はほんの一部にすぎませんが、ニュースなどからは知りえることのできない学生たちの様子を少しでもお伝えできたらと思います。

質問者：TIF　坂本・高野　（YAMP スタッフ）
回答者：日本・イスラエル・パレスチナ学生合同会議に参加する 10 名の大学生（イスラエル 6 名、パレスチナ 4 名）

Q.あなた方の国の若者がどのような生活を送っているのか教えてください。

イスラエル
おそらくどの国にも様々な若者の生活スタイルがあるといえるでしょう。だから、若者がどのようであるか、という漠然とした質問は難しいです。ほとんどコンピューターの前に座って過ごす人もいれば、17,18 歳でも、家にずっと帰らず、パーティをしたり、ナンパをしたりして毎日遊んでいる人もいます。
若者と一言でいっても、みな異なるのです。
ただ、けっこう西洋化した生活を送っているということは一つ言えると思います。

パレスチナ
パレスチナとイスラエルの若者は日本の若者とかなり違います。まぁ 28 歳の日本人がパレスチナとイスラエルの 14 歳といった感じでしょうか（笑）。高校生も、とても成熟しています。他の国の少年少女とはだいぶ異なると思います。なぜなら彼らは特殊な環境下で暮らしているからです。

若者は危険なことを平気でやります。たとえ多くの規制をしいても、彼らは変わりません。彼らはいろいろなところに出かけていき、いろいろなものを見てみたいのです。彼らは全く何も恐れてはいません。それはとても問題なことです。

なにも恐れるものはないようなのです。心理的に何も怖がっていないのです。例えばあなたがもっと多くの制約をつくりだしたら、それはつまり問題を更に増やしているということだけなのです。とはいえ、注意するばかりでなく、もう少し彼らを信用しようとする必要がありますが。

Q.普段どのようなことをして遊んでいますか？

イスラエル
多くの若者はクラブで踊るのが好きで、夜 11 時や 12 時になるまでまちにくりだしています。かなり遅くまで出歩いていますが、自分で責任の取れる範囲で行動をしています。
ビーチを夜散歩したりもします。彼らは、映画を見たりするよりも体を動かすほうが好きです。
高校生に関していえば、海へいったり、レストランにいったり、お祭りを手伝ったりします。あと、男の子はサッカーやバスケットボール、女の子はショッピングといったところでしょうか。
でもやりたいことができないということもたくさんあります。

また、まちで暮らす人々は都会で暮らす人々とはだいぶ違います。まちには娯楽施設は充実していませんが、多くの資源をもっています。こどもたちは学校で学び、放課後は学校で遊びます。

パレスチナ
パレスチナでは、 高校生や若者が遊べるような場所や、クラブなどはあまりなく、むしろそのような場所にいくことを禁止されているケースが多くあります。劇場や映画館などもそんなに多くなく、彼らが若いエネルギーを発散させて楽しめるような場所はあまりありません。とても限られています。
例えば歌が上手など、才能のある子がいるとします。
でも彼や彼女を受け入れてくれる場所がないのです。
無駄なのです。ダンスに関しても同じです。
ダンスをするところなどないのです。

Q.最後に、大学生のみなさんに質問。いまの最大の関心事はなんですか？
単位を取得して、証明書をもらって、
無事卒業できるか、就職できるかといったことでしょうか・・・。

◆　このインタビューは、日本、イスラエル、パレスチナの学生による日本での共同生活の最終日前日に行いました。
さまざまな壁に阻まれ、普段交流する機会の少ない彼らが、それぞれの故郷の抱える紛争、宗教の対立といった問題を超えて、個人としてお互いに意見を述べ合っている姿が印象的でした。
また、日々緊張下で生活を送る学生たちですが、同世代として同じような悩みを抱えているのだという一面も垣間見ることができ、彼らに親しみを感じるひとときとなりました。

＊＊＊パレスチナ人のユーモアと諷刺＊＊

アラブ世界には「ヌクタ」といわれる小ばなしがあり、ユーモアセンスに富んだ文化がありますが、パレスチナでは、占領という非日常が日常化している倒錯した状況を諷刺したブラック・ジョークが、普段の会話でも口をついて出ます。
例えば、出かける前に入念にヒゲ剃りをしながら、
「アラブ人だってバレると逮捕されちゃうから」などと言うのもその一つですが、そうした要素を多分に取り入れ、芸術表現にまで高めたものもあります。一昨年、日本でも上映されたエリア・スレイマン監督の映画『D.I.』（アルカサバシアターのディレクター、ジョージ・イブラヒムも冒頭のサンタ役で出演）はその典型ですが、『壁―占領下の物語Ⅱ』もまた、笑えないパレスチナの深刻な状況を笑い飛ばす、絶妙なユーモア文化の一つであるといえるでしょう。